

**V 児童生徒の「生と死」のイメージ
に関する意識調査を生かした指導**



児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査について

＊本調査結果は、平成17年1月24日に公表しました。

○ 調査の趣旨

本県において2年連続して尊い命が失われる痛ましい少年事件が発生していることから、子どもたちに命の大切さをいかに教えていくかが強く問われている。特に、佐世保市内の小学校で起きた児童殺傷事件の家庭裁判所最終審判の決定要旨によると、加害児童は自己の経験や共感に基づいた「死のイメージ」が希薄であるとのことであったが、このことは他の子どもたちについても危惧されるところであり、その実態を確認して今後の対応に生かす必要があると考えた。

そこで、現在の本県の児童生徒が「生と死」についてどのようなイメージや経験を有しているか、その傾向を把握するため、抽出児童生徒によるアンケート調査を実施することにした。

- 調査対象
 - ・ 公立小学校の第4学年及び第6学年
 - ・ 公立中学校の第2学年

- 調査方法
 - ・ 対象学年の児童生徒、各1,000人程度を抽出して実施。

[回答した児童生徒の実数]

学 年 \ 教育事務所	長崎	佐世保	島原	五島	壱岐	対馬	計
小学校4年生	684	252	110	60	40	50	1,196
小学校6年生	680	304	107	60	40	50	1,241
中学校2年生	669	252	103	60	40	50	1,174

[調査期間 平成16年11月～12月]

○ 調査内容（6項目）

- 1 家族や親戚などで、赤ちゃんが生まれたときの喜びを感じたことがありますか。
- 2 家族や親戚など、身近な人が死んだときの悲しみを感じたことがありますか。
- 3 死んだ人が生き返ると思いますか。
- 4 動物が生まれるところを見たことがありますか。
- 5 死んだ動物が生き返ると思いますか。
- 6 人を傷つけたり、殺したりしたとき、どのような罰を受けるか、法律や制度について知っていますか。（中学校2年生のみに質問）

追跡調査内容（2項目）

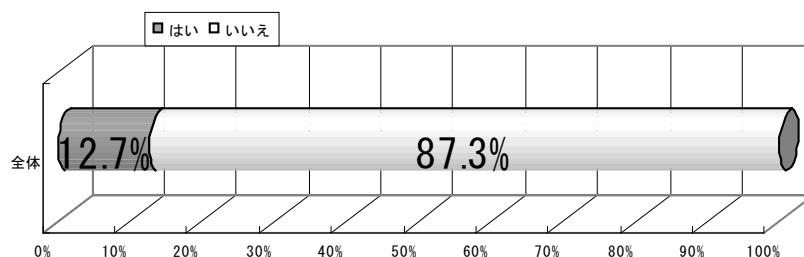
- ・ 「死んだ人が生き返る」と答えた児童生徒の理由
- ・ 「死んだ動物が生き返る」と答えた児童生徒の理由

この調査結果は、新聞等において、「死者生き返る 15 %」や「人、生き返る 15 %、T V 見た／ゲームでリセット」等の見だしで掲載され、全国的にも話題となりました。

1 死んだ動物の生き返り〔資料 1〕

問

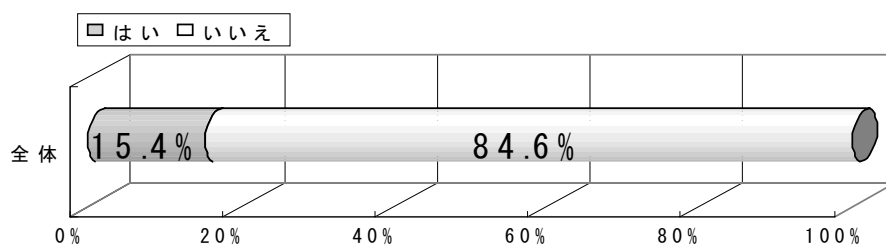
死んだ動物が生き返ると思いますか。



2 死んだ人の生き返り〔資料2〕

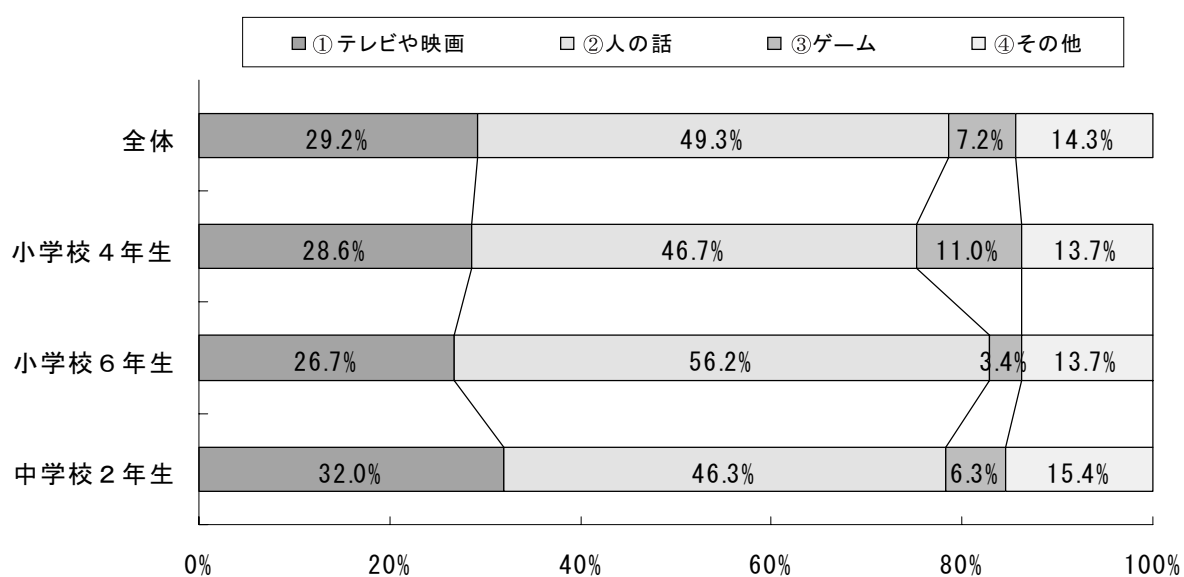
問

死んだ人が生き返ると思いますか。



「死んだ人が生き返る」と答えた児童生徒の理由

- ① テレビや映画等で生き返るところを見たことがあるから
- ② 生き返る話を聞いたことがあるから
(テレビ等を見て・本を読んで・人の話を聞いて)
- ③ ゲームでリセットできるから
- ④ その他



1 資料名 「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」
(長崎県教育委員会調査結果から一部抜粋)

2 資料について

子どもたちを取り巻く環境は、核家族化が進み、隣近所の交流が少なくなる中で、相応して「命の誕生」や「死」にふれる経験も少なくなっているように思われる。特に、「死」に関しては、親戚が亡くなってもその葬儀に参列しなかったり、たとえ参列しても、葬儀社での「お焼香」だけに終わってしまったりするなど、「死」を身近なものとして感じる機会は生活様式の変化に伴って少なくなってしまうように感じる。

本時は、本県の児童生徒の「生と死」についてどのようなイメージや経験を有しているか、その傾向を把握するために実施した意識調査結果を授業の資料として提示する。提示する内容は、「死んだ動物が生き返ると思いますか」「死んだ人が生きかえると思いますか」に関するものとし、動物や人が「生き返ると思いますか」と答えた児童生徒の理由の中の「ゲームでリセットできるから」に着目し考えさせていきたい。グラフから感じること、考えることを語り合い聞き合うことをとおして、「動物の命の重さ、尊さ」から「人の命の重さ、尊さ」に考えを広げていく。

なお、この資料は、短学活などの時間で扱うことを考え、15分から20分間で指導することを想定している。

3 留意点

割合のグラフから事実が推測できる小学校第6学年を想定して授業を展開するが、思春期の入り口で、多感な時期であることを考慮して授業を行う。周囲の情報に影響を受けやすいということ、本調査の結果(数字)は一つの傾向を表したものであることや回答した一人一人の生活環境の違いがあること等、数字だけが強調されないようにする必要がある。

また、輪廻転生的な考えをもつ児童もいることが考えられるので、その思いは受け止めるということにとどめ、現実として生命体の死はゲームのようにリセットでは生き返らないことを認識させていくようにしたい。

さらに、教師が児童の発言をしっかりと受け止め、じっくり話し合うことが授業の最大のポイントとなるため、日頃から児童とのかかわりを深め、学級経営の一層の充実を目指した指導に努め、授業の効果を高める土台としたいところである。

4 ねらい

資料(グラフ)を読み、自分の考えを整理して発言したり、他の気持ちや考えを聞いて自分の思いや考えと比較する等の活動をとおして、命の有限性について考え、自他の命を大切にしていによりよく生きていくこととする心情を高める。

5 展開例

学 習 活 動	指導上の留意点
1 資料を見て、気づいたことや考えたことを発表する。 ○資料1「死んだ動物が生き返ると思いますか」を見て、気づいたことや思ったことを発表しましょう。 ○資料2「死んだ人の生き返り」を見て、どんなことを思いましたか。 ○3番目の理由の「ゲームでリセットできるから」について考えたことを発表しましょう。 2 「心のノート」を読み、命を大切にしていこうという思いを温める。	1 「生き返らない」「生き返る」「場合によっては生き返る」という考えがあろうが、考えとその理由を発表する。 気づいたことを発表していくが、個人的な思い（家庭的なこと等）が発表内容に入っているものも受け入れる。 ・生き返ると思っている人もいるのだな ・ほとんどが生き返らないと思っているのだな ・命は終わってしまったらおしまいなので、生き返らないと思う ・テレビで生き返りの話をしていたので、生き返ると思う ・いつの日か別のものに生まれ変わるかも知れない 「死んだ人の生き返り」について、割合とその理由をあわせて考えていく。 ・動物より人が生き返ると思っている人が多い ・テレビの影響が大きいのだろう ・生き返らないと思っているが、先祖が自分を見守ってくれているような気がする 「ゲームでリセットできるから」という項目が、3番目になっていることを考える。 ・リアルなゲームが多いから、勘違いしている ・小さいときからゲームをしているからそう思うのだろう 2 「心のノート」(p.62)を使い、教師がじっくりと詩を読むことで、「命に対する思い」を深めさせていく。

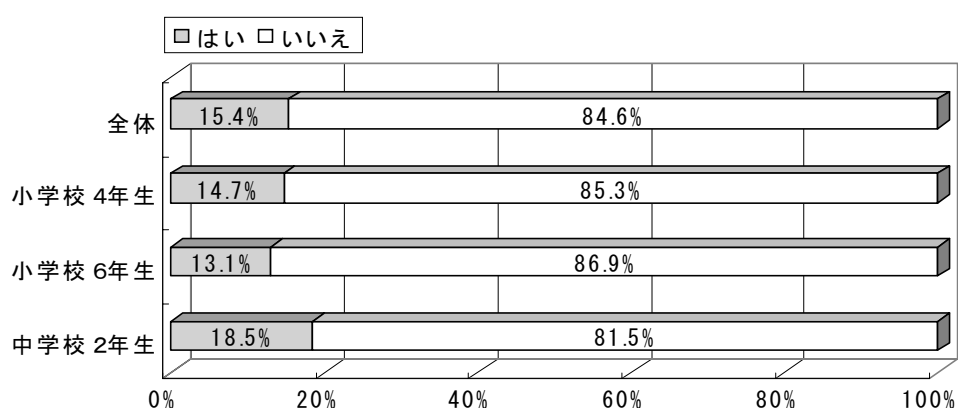
1 1 中 学 校 用

この調査結果は、新聞等において、「死者生き返る 15 %」や「人、生き返る 15 %、TV 見た／ゲームでリセット」等の見出しで掲載され、全国的にも話題となりました。

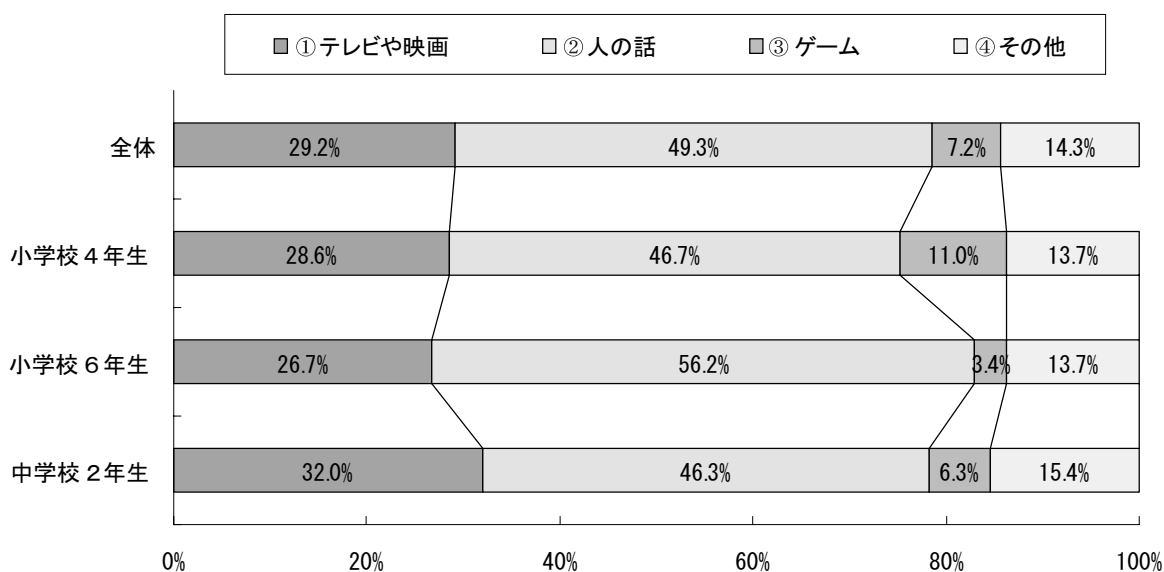
1 死んだ人の生き返り〔資料 1〕

問

死んだ人が生き返ると思いますか。



□ 「死んだ人が生き返る」と答えた児童生徒の理由



2 調査結果の考察〔資料2〕

（1）死の認識について

今の子どもたちは、出産や葬儀などを含めた生活様式や社会環境の変化等から、以前と比べて人の誕生や死に直に接する機会が少なくなっていると思われる。今回の調査で、子どもたちは、自らの経験によるのではなく、周囲からの様々な情報の影響を受けて、死を認識していることが明らかになった。

（2）生の喜びや死の悲しみの経験について

人や動物の生や死の場面に直に接し、喜んだり悲しんだり、他者の気持ちに共感したりすることは、人として成長する過程において欠かせないことである。学校教育においては、飼育や栽培などの体験活動を一層重視するとともに、家庭や地域においても、機会をとらえて、子どもたちに命の尊さを語り、「生と死」について共に考えることが求められる。

1 資料名 「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」
(長崎県教育委員会調査結果から一部抜粋)

2 資料について

長崎県教育委員会は、平成16年11月から12月にかけて、小学校4年・6年、中学校2年生各1,000人程度を対象として、県内の『児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査』を実施し、平成17年1月24日にその調査結果を公表した。

この調査結果で最も注目すべきことは、「死んだ人が生き返っている」と児童生徒が少なからずいた(15.4%)ということである。

また、本調査では、「身近な人が死んだときの悲しみを経験したことがない」と答えた児童生徒が18.7%おり、「死んだ人が生き返ると思う」と答えた児童生徒の学年別比較と同様に中学2年生が高くなるという意外な結果を示した。

現代の子どもたちは、出産や葬儀などを含めた生活様式や社会環境の変化等から以前と比べて人の誕生や死に直接接する機会が少なくなっているように思われる。そのような生活環境の中で、子どもたちは、人の話やテレビ、映画、本等から得られた情報をもとに死のイメージを形成しているようである。死の訪れが、生命体としての体の最期を指すのは理解できるが、魂だけは輪廻転生をするのかしないのか、あるいは魂と併せて体も生き返るのか、獲得する情報量が多くなるこの時期には答えを出すのが難しい問題である。このような中では、命はただ一つ、かけがえのないものであることや、自他ともに生命を尊重して生きていくことを改めて見つめ直す機会が必要であると思われる。

本時においては、読み物資料を使用せず、調査結果のグラフ等を提示して授業を展開していく。提示する内容は、調査結果の中から「死んだ人が生き返っている」とその理由、「調査結果の考察」に関するものとする。グラフから感じることを、考えることを語り合い聞き合うことを通して、命の連続性や有限性について感じ、命の重さや尊さについて考えるよう導きたい。

なお、この資料は、短学活などの時間で扱うことを考え、20分から25分間で指導することを想定している。

3 留意点

周囲の情報に影響を受けやすいという中学生の発達段階を考慮した授業を行う。本調査の結果(数字)は一つの傾向を表したものであることや回答した一人一人の生活環境の違いがあること等、数字だけが強調されないようにする必要がある。

輪廻転生的な考えをもつ生徒もいることが考えられるので、そのことには深入りを避け、生命体の死として認識させていくようにしたい。また、生徒の家族状況等プライバシーには十分配慮したい。

なお、ほとんどの生徒が、生命体が生き返ることはないと思っているので、一つ一つの資料については、なぜ、こういう結果が出たのだろうかという気持ちを持たせながらじっくりと考えさせるような展開をしていくことが効果的であると思われる。

教師が生徒の発言をどのように受け止めていくのかということが授業の最大のポイントとなるため、日頃からの生徒とのかかわりを深め、学級経営の一層の充実を目指した指導に努め、授業の効果を高める土台としたいところである。

4 ねらい

資料（グラフ）を読み、自分の考えを整理して発言したり、他の気持ちや考えを聞いて自分の思いや考えと比較する等の活動を通して、命の連続性や有限性などについて見つめ、考え、自他の命を大切にしていこうとする心情を高める。

5 展開例

学 習 活 動	指導上の留意点
1 資料1を見て、思うことや考えることを発表する。 ○資料1「死んだ人が生き返ると思いますか」という意識調査の結果を見て思ったことを発表しましょう。	1 「死んだ人が生き返る」と思っている結果（数字）のみに目を向けるのではなく、その理由についても考えを求めていく。 ・確かにテレビや映画で生き返るという内容のものもあるが、それは現実には信じがたい ・大切な人が死んだら、生き返ってほしいと思うにちがいない ・死んだら何もないと思うと悲しくなる ・死んだ人が生き返るとは思わない ・ゲームのリセットはあくまでもゲームだからできることだと思う ・死んだら体は元に戻らないと思う ・死んだらどうなるのか誰も分からないと思う ・魂はどうなるのかわからないと思う なお、輪廻転生（魂）については、教師は一概に否定せず、そう思っている理由などを尋ねるにとどめる。
2 資料2の「調査結果の考察」を読んでどのように思ったか、また、これまでの生活を振り返ってどのように思ったか発表する。 ○資料2「調査結果の考察」を読んで、自分の考えをまとめてみましょう。	2 考察を読んで、「どのように思ったか」「自分はこれまでどのように生活してきたのだろうか」という視点をもたせて、自分の考えをまとめさせる。 ・社会の中に情報があふれているが情報を選んで生活していこう ・生命を大切にすることについて、深く考えていこう ・生きていることが当然ではなく、光り輝くような生き方をしたいと思う
3 「心のノート」を読んで命に対する考えをみつめなおす。	3 「心のノート」の p.74～p.77 を読み、命の「連続性」「有限性」「偶然性」について改めて考えなおし、命の大切さについて考えを深めていく。

1 2 判例を使った指導（中学生向け）

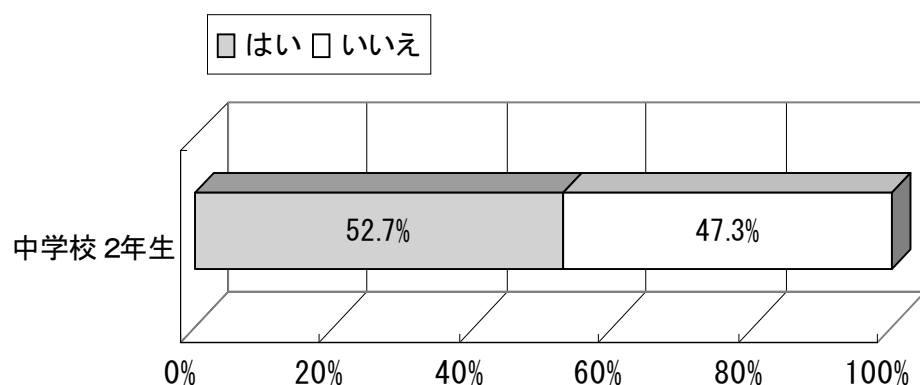
資料 1

次の問は、「死者生き返る 15%」や「人、生き返る 15%、TV 見た／ゲームでリセット」等の見出しで新聞などに掲載され、全国的にも話題となった「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」（平成 17 年 1 月 24 日公表）において、中学校 2 年生約 1,000 人を対象に質問したものです。

問

人を傷つけたり、殺したりしたとき、どのような罰を受けるか、法律や制度について知っていますか。

【全体】



- ◆ 法律や制度について知らないと自覚している生徒が 47.3% いることが明らかになった。

（児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査より）

【事例】

1 犯行のようす

- (1) 被告人A（42歳）は、サラ金等に対する多額の借金の返済に窮した末、知り合いのB子を殺害して金品を奪い取ろうと企て、平成〇年〇月〇日午前11時ころ、B子宅に侵入し、B子に対し、その頸部をロープで絞め、よってその場で同人を窒息死させて殺害した。
- (2) その直後ころ、同所において、たまたま風邪で学校を休んで自宅にいたB子の長女C子から上記犯行を目撃されたと思い、その口封じのためには同人をも殺害するしかないと決意し、B子に対するのと同様の方法でC子を窒息死させて殺害した。
- (3) そうした上で、B子の銀行預金通帳及び銀行届出印を奪った。
- (4) また、犯行の発覚を防ぐため、B子及びC子の死体を庭に埋めて遺棄した。
- (5) その後、奪った銀行預金通帳と銀行届出印を使用してB子の銀行預金を騙し取ろうと企て、銀行において、B子名義の預金払戻請求書を作成した上、これをあたかもB子（の使者）が預金の払戻しを請求するように装って銀行員に提出行使し銀行預金を騙し取った。

2 罪名及び罰条

強盗殺人	刑法240条後段
（殺人	刑法199条）
死体遺棄	同法190条
有印私文書偽造・同行使・詐欺	同法第159条第1項
	第161条第1項
	第246条第1項

3 判決

主文 被告人を死刑に処する。

4 量刑の理由

- ・強盗殺人、死体遺棄、有印私文書偽造、同行使、詐欺という凶悪事犯。
- ・金のためという身勝手な理由により、かけがえのない他人の命を奪った。
- ・被害者は、理不尽にも、首を絞められ、もがき苦しんで死亡した。
- ・犯行の発覚をおそれて何の罪もない幼い子の命まで奪った。
- ・短気で金銭にルーズという自己の欠点を悔い改める機会は、これまで何度かあつ

たにもかかわらず、悔い改めなかった。

- ・現在においてもなお、犯行についての反省の気持ちや、被害者に対する謝罪の言葉がない。
- ・死体を庭に埋め、遺棄して犯行を隠蔽した。
- ・B子の銀行預金は、長女の学資のためにと、家計から少しずつやりくりして貯蓄していたものである。
- ・遺族の悲しみや怒りは非常に強く、被告人に極刑をのぞんでいる。
- ・本件は、静かな住宅でおきたもので、社会に与えた影響、特に近隣住民に与えた衝撃や不安は極めて大きい。
- ・他方、被告人は、幼少のころ、父母が離婚し、親戚や知人宅を転々とさせられ、小学校、中学校を通じて8回も転校を余儀なくされ、その間、同級生から仲間はずれにされたり、いじめを受けたりしたし、それらが心の深い傷となり、成人になっても、なかなか人を信用できず、真に相談できる友人関係をつくることができなかったなど、同情すべき事情もある。

当裁判所は以上のような諸事情を総合考慮し、被告人に対して有利な事情を最大限くんだとしても、もはや極刑は免れないと判断した。

よって、主文のとおり判決する。

5 事件後のB子の家族と被告人Aの家族

① B子の家族

- B子の祖母はB子とC子を失った喪失感から体調を崩し、病気になった。
- C子は、将来、ケーキ屋さんになりたいという夢があり、よく父親にケーキを作っていた。父親はケーキが好きであったが、事件後、ケーキを見るとC子を思い出し、ケーキを食べることができなくなった。
- B子がパートで得た収入をC子と長男（5歳）と次女（3歳）の学資資金としての預金していたが、預金が奪われたため、今後の生活設計を見なおさなければならなくなった。

② 被告人Aの家族

- 毎日のように嫌がらせの手紙や電話を受け、これまで生活していた住宅に住めなくなり、となりの市へ引っ越した。
- 被告人Aの妻は、ショックのあまり病気になり寝込んだが、今は二人の子どものためにはたらきに出ている。
- 二人の子どもは転校先でも父親のことがばれていじめられないか心配しながら学校生活を送っている。

1 題材 判決文

2 対象 中学校3年生

3 ねらい

児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査（平成17年1月24日公表）によると、「人を傷つけたり、殺したりしたとき、どのような罰を受けるか、法律や制度について知っていますか？」という問いに対して、47.3%の生徒（調査対象は、県内の中学校2年生の中から生徒1,174名）が「いいえ」と答えている。

中学校では、3年生社会科の公民的分野の「(3)現代の民主政治とこれからの社会」という内容項目において、法に基づく裁判のしくみや働きについて学習することになっているが、扱う内容は国民の権利・義務を保障し、社会の秩序を維持するための裁判の働きなど基本的な理解にとどめることになっているため、具体的な判例などを通して、罪と罰について認識させるところまでは求められていない。

しかしながら、安易に人を傷つけたり、殺したりする昨今の事件の状況を踏まえると、そのような行為の罪の重さを道義的に分からせるだけでなく、法制度の面からもしっかりと理解させることが必要と考える。

そこで、本題材では、具体的な事例をもとに、将来があったはずの人間の命が理不尽に奪われたということが何より重要な問題であることをとらえさせながら人の命の大切さと殺人はいかなる場合も決して許されないことを理解させていきたい。また、殺人を犯した場合、本人が受ける刑事罰と本人及び家族が受ける社会的制裁、被害者家族の悲しみや苦しみ等について考えさせ、反社会的な行動が本人ばかりでなく周囲にどのような影響を及ぼすのかということについても知らせていきたい。

4 資料の取り扱い

本資料は、実際に起こった事件を参考にして、犯行の様子や下された判決、事件後の本人や双方の家族の状況等について述べたもの（改作したもの）である。

将来がある人間の命が理不尽に奪われることは決して許されないということを十分考えさせたうえで、殺人を犯した本人が受ける罰の重さとともに、周囲に与える影響の大きさについても感じ取らせることが大切である。

なお、この授業は、道徳の時間としてではなく学級活動等の時間として実施することを想定したものであり、資料に登場する人物の気持ちを推し量っていくという授業展開ではなく、「命の大切さ」を見つめ考えるための展開としている。

5 展開例

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 資料1の結果を見て、感じたことを発表する。	1 学級の実態として、生徒たちは知っているかどうか尋ねながら、資料の結果についての感想を自由に述べさせる。 ・自分も知らない ・「はい」と答えた人は、どの程度知っているのだろうか

作 成 委 員 名

○ 編集委員（☆ 編集委員長）

	片 岡 千鶴子	（長 崎 純 心 大 学 学 長）
	加 藤 政 春	（県立長崎シーボルト大学非常勤講師）
	上 蘭 恒太郎	（長 崎 大 学 教 育 学 部 教 授）
☆	立 岡 誠	（長 崎 県 教 育 会 会 長）
	堀 江 憲 二	（堀 江 法 律 事 務 所 弁 護 士）
	峯 脇 成 彬	（長 崎 市 立 片 淵 中 学 校 校 長）

○ 執筆委員（☆ 小学校、中学校部会長）

〔小学校部会〕	秋 山 壽 哉	（長 崎 市 立 高 尾 小 学 校 教 諭）
	小 林 和 正	（時 津 町 立 時 津 小 学 校 教 諭）
	友 永 優 子	（諫 早 市 立 喜 々 津 小 学 校 教 諭）
☆	森 和 弘	（諫 早 市 立 小 野 小 学 校 校 長）
	森 田 幸 一	（長 崎 市 立 三 原 小 学 校 教 諭）
	柳 堂 圭 章	（国 見 町 立 神 代 小 学 校 教 諭）

〔中学校部会〕 ☆	近 藤 克 巳	（長 崎 市 立 神 浦 中 学 校 校 長）
	高 坂 英 晃	（時 津 町 立 時 津 中 学 校 教 諭）
	畠 中 好 子	（大 村 市 立 桜 が 原 中 学 校 教 諭）
	前 田 勝 弘	（長 崎 市 立 福 田 中 学 校 教 諭）

※ 50音順、敬称略

○ 挿絵は、長崎県造形教育研究会の協力を得て作成しております。

心を育てる道徳教材集

発 行 平成17年3月

編集・発行 長崎県教育庁学校教育課
長崎市江戸町2番13号
TEL 095-824-1111 (代)